

# 研究生生活の歩み

— 学生時代をしのびて —

横 超 慧 日

私、今年実は数え齢で七十七になりました。七十七というと、喜ぶべき齢なのか喜ばんでもいい齢なのか分りませんけれども、だんだんおいぼれてくるから、なるべく余りおいぼれない内に一度昔の話をさせておこうという、皆さんの御親切なお誘いで今日は参りました。

私の生まれたのは愛知県。愛知県の中には尾張と三河とありますが、私は尾張の方なんです。大谷大学では、これまで尾張出身の人と三河出身の人との中から、多くの学者を輩出しましたが、私はその中の尾張の方なんです。木曾川の流れておる方ですね。その尾張の方の一宮市の願行寺という寺の次男坊に生まれました。

余りプライベートなことを申し上げて大変恐縮ですが、私は願行寺の横超日南の次男に生まれました。次男坊ですから、今は寺を持っておりません。大学へ入って以来全然寺院生活から離れてしまいました。

ちょっと余計なことのようにですけども親父の自慢をさせていただきます。自分の自慢はできないから、親父の自慢をさせていただきます。私の父、横超日南は嘉永三年に生まれました。南条文雄先生と同じ嘉永三年の生まれでした。その日南は十八の時に父親に死に別れました。私が父親の日南に死に別れたのは十一歳の時でしたが、誰でも貧しい家に生まれて早く親に死別すると苦勞するものです。私の父日南はそれから京都へ出て勉強ばかりやっており

ました。私の母がきて結婚した時には、年はもう四十六七だったと聞いております。

唯識をおやりの方は御存知でしょうが、今は『成唯識論』を読むというたいい誰でも新導本を用いますね。あ  
の新導本は富貴原さんなんかが法隆寺に学んでおられた時、佐伯定胤和上の下で、良謙和上を初めとする門下の学者  
たちが昭和十四年に編纂し刊行されたものでした。佐伯良謙和上の先生が佐伯定胤和上で、定胤和上の先生が佐伯旭  
雅和上だったのです。そのことは皆さんすでに御承知のことと思います。新導本が出るまでは、性相学の研究者はみ  
な冠導本の『成唯識論』と冠導本の『俱舍論』によって勉強したのですが、その冠導本の唯識論や俱舍論を編纂さ  
れたのは佐伯旭雅和上で、旭雅さんというと泉涌寺におられたので泉涌寺の旭雅和上といい、この方を別にして唯識  
を語ることはできず、浄土教や禅宗などの人もみなそこへ学びに行ったものでした。

その旭雅さんに私の父はついておったんです。だからその当時『成唯識論』の講義を聞いたノートが残っておりま  
す。ノートといっても今日のようなノートではありません。十行か十二行のけい紙に筆で書いた筆記が残っておりま  
す。それから慈恩大師の『義林章』を旭雅和上が明治十年九十四回で講義をせられました。その時は道空と基弁の手  
に成る安永九年の刊本を用いて講義をせられたようで、私の父が入門して講義を聞いておったのは明治十八年ですけ  
れども、その時に「特別にお前に見せてやるから、写すがよい」とのお許しを得て、佐伯和上から、その刊本に旭雅  
和上が書きこまれた傍注筆記本を拝借して、父が写したものが残っています。

以前に富貴原さんが亡くなった時に、私、富貴原さんを偲ぶ文章の中でも書きましたけれども、旭雅和上が冠導本  
の『成唯識論』や冠導本の『俱舍論』を造られた時にそれを助けた人があります。それを勸文者と言います。ここの  
文章については『瑜伽論』何巻何丁を見よとか、或は『無性撰論』の何巻何丁の文を参照せよとかいうように、そう  
いう参考の場所がちゃんと書き込んである。それから冠導本ですから上に注があるでしょう。旭雅和上がちよっとお  
っしゃった箇所でも実際に原本に当って、何巻の何丁にこうあるということを調べ出したのは二人のお弟子なんです。

大谷派から行った人で、一人は豊満春洞さん、一人は藤谷恵燈さんでした。豊満さんのもと美濃の人で、藤谷さんは初めは尾張の人でした。この二人がおられなかったらあの精密に行届いた冠導本の『成唯識論』や『俱舍論』はできなかったらうと思います。旭雅和上が偉いと言っても、偉い先生を更に偉くするのは弟子の力が大きく関係するのではないのでしょうか。

藤谷さんは一宮市奥町の出身でもとは瀬辺恵燈さんと言いました。滋賀県の木之本へ養子して藤谷姓となり、明治二十九年に若くて亡くなれました。豊満さんは美濃の出身でもとは杉原春洞さんと言いました。滋賀県の愛知川へ養子して豊満姓となり、後には大谷派の講師となって、昭和六年に亡くなれました。

こうして大谷派の人々が旭雅和上の門に学び大いに勉強していた時、私の父もその仲間に入れてもらっていたのです。そういうわけで、父は若い頃唯識ばかりやっておったんです。

旭雅和上は晩年には小野の随心院へ移られました。泉涌寺も随心院も、ともに真言宗です。その旭雅和上の弟子に佐伯定胤さんがあって定胤さんは法隆寺へ入り、法隆寺を性相学の本山として基礎づけてしまわれました。だから、法隆寺は今も聖徳宗ですけれども、本は明治の初めに正式に法相宗になったんです。法相宗になってから今年が丁度百年目に当るそうで、この六月法隆寺で復興百年のお祝いの式があったとき、私も参らせてもらいました。

そういうことで旭雅和上の弟子の佐伯定胤さんが法隆寺の管長になりました。法隆寺の佐伯定胤さんと言ったら有名なものですね。和上さんは大学もどこも出ておられないが、漢訳唯識の權威ということで早くから学士院会員になっておられました。その定胤和上のお弟子の良謙和上は興福寺系統から入った方です。だから興福寺系統と泉涌寺系統との両方が一緒になって今の法隆寺の唯識になっていると言っていてよいでしょう。

以上申したような次第で私の父は若い頃唯識を専らにし、晩年には大谷派の擬講になっておりまして、本山の安居にも明治三十七年頃から二度程都講を勤めたことはあるようですが、著書は何も残しておりません。

十一歳の時に父親が死にまして、私が中学に入ったのが大正七年でした。中学へ入って初めて洋服を着ることができ、靴を履いたのも初めてでした。中学に入った頃、農村の私の村にも電灯がや々とつきました。それ以前、私の小学校時代にはみんなこの家もランプか行燈でしたから、毎日のランプのホヤ掃除や油を注ぐこと、それが子供の仕事だったんです。「さーて電灯がついた。でも煙草を吸うのに、どうやって煙管に火をつけるのだろう」と皆で不思議に思ったものです。私が中学に入った大正七年はそういう時代です。

名古屋の東別院の中にある尾張中学に入りました。昔は大谷派尾張普通学校という名前だったそうです。公立の学校を立てるのに大谷派の学校を利用した訳です。その大谷派普通学校の初代校長になった人が、明治二十一年に日本中で初めて博士が二十五人できたその二十五人の中の一人だったところの南条文雄という方です。その当時は普通学校ですから宗教を学校で教えたかどうか知りませんが、そういう由緒のある所ですから、私の中学時代の先生は大谷大学出身の方がたくさんおられました。

中学に入ってから五年間、卒業する迄の間、先ず一年の時には『佛教読本』、二年では『高僧和讃』の講義、三年四年では『八宗綱要』で唯識やら天台やらあいう漢文のものをやり、五年の時には『浄土文類聚鈔』、それから四年の時にはもう一つ『大乘起信論』の講義を聞きました。『大乘起信論』などは今読んでも難しいものです。それを大谷大学を卒業してホヤホヤの湯気の出そうな先生が、学校で学んできたままの難しい術語で講義をされていました。全然分らなかったけれどもね。そのふんい気が印象に残っています。

中学のことを思い出していつでも先ず頭に浮ぶのは、私の同窓生の龍山章真君のことです。先年桜部教授が龍山君の遺著を大いに助けて覆刻補訂版を出して下さっているようですが、この龍山というのは本当に頭のいい男でした。中学に入った時から卒業する迄首席でぶっ通し、一度も下ったことがない。一番ですから級長で制服の袖口に金筋が入ります。私は入った時は二番だったから副級長で銀筋だったんですが、それも一学期だけで二学期になったら銀筋

を取られてしまった。八番になり十二番になり、どんどん下って行って二十九番になったことを覚えています。私はだんだん下ったけれども、あの龍山だけはちっとも下らなかつたですね。

当時の服装は勿論制服の学生服で金ボタン黒い巻きゲートルを巻いていました。一年でも上級生に道で会ったら必ず立ち止まって挙手の敬礼をしなければならん。しないとすぐビンタを食います。当時の中学の校長は一柳知成先生でした。私が学校へ入る校門の前を西の方からやってくると、東の方から上級生が来る。向うがぱっとこちらに向って敬礼しているから、これはうっかりしたと思ひあわててぱっと挙手の敬礼をしたら、後ろから「バカヤロー、お前に敬礼しているんじゃないよ。わたしに敬礼しているんだぞ」と大きな声でどなられた。何とそれが校長の一柳先生だった。叱られたことがある思ひ出、今も忘れられない。

この一柳さんという先生は偉い人でした。後には大谷派の宗務総長もやったことのある人で、非常に学問の深い方でした。明治三十一年に大谷派から留学を命ぜられて中国へ行つた。三十三年に義和団事件というのがおこつたために、とうとう向うに居ることができなくなつて帰つて来られたけれども、それまで南京に行つておられた。そこに真宗大谷派で立てた学校があつたのです。その当時大谷派は中国へ佛教を弘める為に学校を立てておつたんです。

中国に南条先生とも親交のあつた楊仁山という近代では最高の佛教学者がありました。この人が一柳先生と色々手紙のやりとりしてそれが残っている。楊仁山氏はずっと南条先生とも親しく交り、文通もしておられました。楊仁山氏関係の文集である『等不等觀雜錄』の中に収められており、金陵刻經處から出版されています。

その中の「日本僧一柳の純他力論を評す」という文を見るとこんなことが書いてある。「純他力論などというのは一家の私言であつて佛教の公言ではない。大經に三輩を明かし觀經に九品を開いているではないか。それなのに貴方の宗では三輩九品を自力だと言つて、それとは別に純他力教を説くが、それは貴宗だけの独自の説である。凡夫往生は全く佛力によるが、それでも自力の如何で階降の差ができるのはこれ千古不易の定論だ」と言つて、どうしても淨

土真宗の純對他力を受け入れようとしていない。その他、南条先生らとの間に交した楊仁山の宗教論も見えて、同じ浄土三部經を読んでおっても、日本と中国とでこんなにも違うかと驚かされる。向うの人には日本の浄土教が非常に理解し難かったということが判りますね。

尾張中学を卒業した時に、龍山君は大谷大学へ行き、大谷大学を卒業したらすぐ助教授となり教授となりました。赤沼智善先生のお弟子でした。ドイツへ留学し、体の弱い蒲柳の質だったのに勉強ばかり一生懸命にやって、『梵文十地經』の和訳を出したり、『インド佛教史』だとか、「インドの佛教と外教との關係」について本を出したり、非常な成績を挙げておったけれども、留学の留守中に奥さんが死んだり、お寺が焼けたりして、晩年は非常に気の毒で、早く死んでしまいました。私は余り勉強しなかったから長生きできました。

大正十二年に尾張中学を卒業して私は名古屋の八高、ナンバースクールの最後の八高へ入りました。私はドイツ語を第一外国語、英語を第二にする文科乙類に入りました。全部で三十五〜四十人くらいだったですが、入学当初の席はアイウエオ順でした。私は横超だから、遠藤の次のオの所に来て加藤より前に来なければいけない。だけど私は一番終だったんです。「忌々しいな。補欠で入れてくれたのかしら。誰かが止めたから一つ繰り上げか何かで入れてくれたのかな」と思って、ちょっと劣等感に陥ったんです。後で考えてみたらそうではなかったんですね。余計な劣等感を持っていたことが判った。入学の時学校へ出す履歴書には自分の名前に仮名を打って出すのですが、私の家は横超という字に仮名をつけるのに正しい方法で「ワウテウ」と仮名を打つことになっていました。それで届けておいたんだから一番仕舞になっていたんです。あとでそれに気がついて劣等感は拭い去ることができましたが、自分で書いて届けておきながら、自分で気がつかないでいたのです。

八高の時には色々なことがありました。大体あの頃旧制高等学校の先生には寺院出身の人が多かったようですね。漢文の先生や哲学や日本史・東洋史の先生など、そういう方面の先生は大抵皆坊さんだった。当時の校長は芝田徹心

という三重県の人で、後には学習院の院長になった方でしたが、この方はたしか真宗高田派の出身だったはずで。

数学の先生に椎尾ひとしという人があった。有名な佛教学者の椎尾弁匡博士の甥に当られる方で、ローマ字論者として大いに活躍しておられた。担当は数学の先生で、この先生の数学で五十点取ったら最高というむづかしい授業でした。私なんか二十点か三十点だったと思う。だけれども佛教青年会などを通して非常に思い出の深い先生でした。

高校時代にはなつかしい先生がまだその他沢山ありますが、これくらいにしておいて、さて次に八高を卒業して東京大学へ入った時のことを聞いてもらいましょう。大学では文学部のインド哲学科へ入りました。その当時は高校さえ卒業していたらみんな文学部へ無条件、無試験で入れました。大正十五年に入りましたから、今年で五十七年間佛敎の勉強をやっていることになります。

東京大学では今でもそうですけれども、佛敎学科と言わずにインド哲学科と言っています。何故インド哲学科と言うかというと、後に大谷大学で四代目の学長になった村上专精先生が、昔東京大学で佛敎学を講じて教授になっておられました。それから高楠順次郎という先生がおられました。村上先生が東京大学で教授であった時に、安田銀行を創立した安田善次郎翁と親しくしておられたので、その人の所へ東京大学に佛敎を研究する為の佛敎学の講座を設けたい、と頼みに行かれた。安田さんは村上先生の人柄を大変尊敬していたので、「それでは及ばずながら援助させていただきます」と約束されたんだそうです。ところが村上先生が戻って来てそのことを高楠先生に話したところ、高楠先生曰く、「駄目です。佛敎学の講座を国立大学に置くなどということはできません。佛敎学講座を置くことにしたら、キリスト敎講座だとか天理敎講座だとか大本敎講座だとか、そういういろいろの宗教がみな講座を設けると願出てきたとき断ることができないでしょう。大体佛敎というものは、インドの哲学宗教の中に起ったものです。だからそういうものを知らずに佛敎がわかる筈がない。インド哲学講座で結構です。佛敎学はいけません」と、どうしてもきいてくれない。村上先生ブンブンに怒っちゃったけれども、高楠先生の勢力にはどうもかなわないで、とうとう

憤まん遣る方なく諦めてしまわれたということです。

このことを私は常盤先生から聞きました。常盤先生が確か随筆集『超と脱』だったかの中にそういう経緯を書いておられますから、もう少し詳しく事情を知ろうと思われる方はその随筆集を御覧いただくと思います。

私が入った大正十五年にはインド哲学科に第一講座、第二講座、第三講座とありまして、第一講座はインド哲学及びインド佛教、それが木村泰賢先生の担任。そして木村泰賢先生がインド哲学科の主任教授でした。常盤先生は明治三年生まれで木村泰賢先生は十四年に生まれておられるから、十一年程木村先生の方が後だけれども、木村先生が主任教授でした。常盤先生は第二講座で支那佛教。第三講座の島地先生は専任講師で日本佛教でした。しかしあの当時は良かったですね。今の私に思われる所では最高の先生方でした。

木村泰賢先生は曹洞宗の人で出身は岩手県です。木村先生が亡くなって大分後ですが、多分、昭和三十七年頃だったと思います、私、岩手県の方へ行く用事があって、木村先生の故郷を尋ねて岩手山の麓迄行きました。そこは山中の過疎地帯で、人情の如何にも純朴さがうかがわれる淋しい所でした。こういう所だからこそ木村先生のようなあしたのおおらかな人柄ができるのだなァと思います、しみじみ感激したことがあります。

木村先生の授業はいつも始まる前に教室で席の取り合いがありました。あの当時文学部は学科が二十ほどに分れておりました。それが全然佛教に関係のないように思われる学科の学生まで皆来るので、早く席を取らないと講義が聞けないんです。ギッシリ詰まる。先生の講義が非常に分り良い。現代的感覚の表現で話される。そのために誰もかもみな聴講に來たのです。皆さんも『原始佛教思想論』などの著書をお読みになって、宇井先生などの文章とふんい気が全然違うことにお気付きたと思いますけどね。

木村先生は大学で宇井先生と同期生でした。宇井先生は高等学校を経て入ってこられた。しかし木村先生はそうではなかった。たしか検定試験なんかに通って、それで入った人です。それが大学を卒業する時に一番になっちゃっ



た。一番で卒業して恩賜の銀時計を貰った。同じ曹洞宗出身である二人が首席の競争で勝負があったこと、このことは、この後の両先生の地位だけでなく、学問の進展にも大きな影響があることとなったように思われます。

木村先生は卒業後東大に残ることになって、恩師高楠先生との共著をはじめ、どしどし研究成績を発表してゆかれました。宇井先生の方は残ることができないもんだから東北へ行ってしまったわれることになった。静かな仙台へ行って一生懸命研究に打ちこまれたが、その胸中には陰に木村先生との対抗意識が潜んでいたことは争われないと思います。『インド哲学研究』を読んでもみますと、事々に木村先生に当っておられるところが見当ります。木村先生はドイセンを評価されていたが、それを「今頃ドイセン、ドイセンといつまでも一生懸命かついでいる者がいる」と言ったり、名前は出してはおられませんが、それはもう事々に自説の対象として木村先生を意識しておられる。私は宇井先生があれだけの世界的に偉大な学者となられたということは、矢張りそうした事情も一つの大きな原因になっていると思われるかもしれません。学問には競争相手を持つということが大きい効果となることを感じている次第です。

木村先生は早く死んでしまわれました。私が大学院の一年生の時、昭和五年に亡くなりました。しかも突然。狭心症と言うんですか、何かそういう病気だったと覚えております。木村先生は京都の羽溪了諦先生と大変親しくしておられました。羽溪先生が京都へ帰られるのを東京駅まで見送って行かれたのに、羽溪先生が京都へ帰られたら「キムラシス」という電報が来たというので羽溪先生が夢のようだと言ったという話を聞いたことがあります。本当に突然でした。惜しい方だったですね。

私は木村先生に非常に影響を受けています。宇井先生は木村先生が亡くなってから来られたから大学院時代の後の半分は宇井先生の講義を聞きました。宇井先生になると、学生が全然来なくなってしまうました。専攻の学生五、六人だったですね。席の取り合いなんて全然ありませんでした。

木村先生の講義はずっと見通しを立てた非常にスケールの大きいものでしたけれども、宇井先生はコンクリートで

固めたような非常に、ガッチリ積み立てた揺ぎのない研究です。私は細かいことは面倒でとてもやれないのですけれども、私の学風は木村先生に影響せられている所があると考えています。学問は細かくガッチリやると同時に大まかな見通しをつけてやることも大事だと思います。小さく細かくばかりやって全体がどういうふうに動いて行くかということが分らんではないかと思っています。

第二講座の常盤先生は真宗大谷派の人で仙台の出身の方です。木村先生よりも十一ばかり齢は上だけれども、長い間講師でした。私が学生になった頃にやっと教授になられました。常盤先生のことには前に大谷大学の『佛教学セミナー』に私の見たなりの伝記を書いたことがありますから、或は読んでいただいたかと思いますが、常盤先生は村上専精先生から大いにその影響を受けられた方です。

私共の学生時代には中国佛教の研究書というと境野黄洋先生の『支那佛教史綱』しかなかった。境野黄洋さんは本来に偉い学者であつたけれども、『高僧伝』にこうある、どういう本にこうある、というように色々の本を調べそれを寄せ集めてできたのが『支那佛教史綱』でした。ところが常盤先生はそうじゃない。現地へ行って見なければ駄目だ。土地を離れて思想というものは考えることができない、ということ、例えば道安という人が長安にいた、道安の弟子の慧遠は廬山におつた。その頃竺道生は南京におつた。すると南京へ行き廬山へ行き長安へ行く。そしてその当時これらの地は文化史的にどんな地位にあつたのか、そういうことを考えてみる。或は曇鸞大師という人は山西省石壁山玄中寺におつた。そこへも行つて見たけれども仲々見当らない。そこで自分でずっと捜して歩いた。その為には歴史の本を見るのは当然です。佛教の歴史ばかりじゃなくて、昔から沢山ある中国の地誌を見たり、金石文を集めた書物を徹底的に調べた上で方々を歩くんです。長安や洛陽へ行くんだったらいいけれども、曇鸞大師の玄中寺へ行くとなると、石壁山玄中寺と言つたて誰にも判りはしません。お寺の名前はしょっちゅう変ります。浄土教の曇鸞さんがかつてここに居られたと言つたところで、曇鸞さんが亡くなってからその後何年か経つて次に入った人が禅や

律を主として学んだりすると、玄中寺という名前だけでなく宗派も変ってしまう。時につれて地名も宗の名もかわる。だから常盤先生も色々調べて行って、確か大原から南西何里くらいの所にあったと言ったからこの辺りの筈だが、と言つても、誰も教えてくれない。だけれども色んな石碑を調べてとうとう見つけてしまいました。今日日中佛教交流の拠点として日本の佛教徒が必ず行く所になっている玄中寺、それを常盤先生が見つけたんです。

玄中寺に常盤先生が行った時、丁度その晩は月蝕だった。だから真暗になった。それからまた月が出て明るくなった。その様に探して見当らず途方に暮れていた時、たまたま一つの碑を見つけて玄中寺をたしかめることが出来、心の中がとたんに明るくなった。その時の感激を先生は漢詩にして残しておられる。その碑があります。五十三年に私が中国へ行つた時には道路も整備され復興された玄中寺を自動車で訪ねましたが、常盤先生は自動車も自転車もない。自分の足で歩き廻って見つけておられる。そこを見た時私はもう泣けて泣けてしかたがなかった……。

それから又、中国の佛教を学ぶのには、佛教のことだけを調べていても駄目ですよ。中国ではお釈迦さんと同じ頃に孔子が出て、その後孟子が出たり老子が出たり荘子が出たり、中国思想が非常に大きく発展しておる。そこへ西方から佛教が入って来て、それと摩擦しながら終に融合することになる。だから中国思想との関係を蔑ろにして中国佛教の特色がわかる筈がない。そこに目をつけて常盤先生は『中国に於ける佛教と儒教道教』という大きな本を出しておられます。あの当時そんな本を出した人は他に誰もいない。そういう所へ目をつけられた訳です。

それから佛教を研究するのに私は何宗を学ぶからと言つてそれ一つだけをやっておつては駄目なんです。天台宗をやるんだからお経は法華経さえ読んだらいいと、そんな訳にはいけません。法華経も維摩経も勝鬘経も般若経も阿含経も方等部の大集経だとかそういうものも皆知つておいてでなければ天台宗のことは判らない。だから常盤先生は『佛教經典の研究』という本も出された。常盤先生の学位論文だったと聞いていますが、とにかく主な大乘經典を全部調べておられます。そういう点も大事な目のつけどころだったと思います。

常盤先生は佛性の研究を志して涅槃經の考察に全力を傾けられました。また『弘明集』という余り人が注意せぬ文献に対しても、その重要性に着眼して大学で講義をしておられました。前に私も大谷大学で『弘明集』の講義をやりかけて、とうとう後がつづかないでおりますけれども、この『弘明集』というのはとてもむづかしい本ですよ。あれは佛教の知識だけでは全然読めない。『論語』や『孟子』の儒教だけでも駄目。『老子』も『莊子』も知っておっても、それだけではまだ駄目。中国の文学や文体のことなどそうした方面の知識も必須の要件となる。それ故『弘明集』を本当に一人でこなせる人は今でもちょっといないのじゃないかと思っています。常盤先生の講義を聞いていると「弱りましたね」と先生が時々学生の前で正直にその難解を訴えておられました。何でも判ったつもりで偉そうに講義をする先生よりも、正直に「弱ったね」と言われた先生の姿が今以て私には忘れられません。

第三講座は島地大等先生。この先生も偉い方でした。学位は持っておられなかったけれども、まず日本佛教ではあの当時右に出る人はいなかったですね。オーソドックスな学問研究を積んでおられる。漢文なら佛教漢文の正統の読み方で読む。私共はいいかげんに自分の勝手に読んでしまう。それでは駄目ですね。漢文のオーソドックスな読み方で今日はつきり残っているのは唯識の方です。『成唯識論』が一番はつきり残っているけれども、その他のものでは読み方も色々時代によって変遷があります。まず最も信頼の置ける伝統的訓読の仕方を残し伝えられた方として、最も印象に残った権威あるお方は、この島地大等先生だったと思います。

私が入った一年目の時には日本佛教の概説の授業を受けました。学派宗派の分派系統を図示することが中心のようでした。例えば真言宗は弘法大師の後で古義真言と新義真言とに分れた。どうしてそれが分れたか。古義、新義とはどういうことか。新義真言が豊山派と智山派とに分れた。豊山派というのは長谷寺の方で、智山派というのは智積院の方であるが、そこにはどんな学者が出て、どんな点に特色があったとかいうようなことを簡潔に図示して説明して下さいました。本当に分り易く、要点を表にして講義された。あれだけ学問の中の広い先生はちょっといないと思います。

当時国訳大蔵經というのに二つありまして、一つは国民文庫刊行会から出ている国訳大蔵經で、これは私共学生時代に一冊五円で売り出されました。もう一つは昭和新纂国訳大蔵經と言って、これは一冊一円でした。一円と言うと東京中タクシーに乗るのにどこからどこまで乗っても一円均一という円タクが行われていました。私は浅草の裏の方に住んでおったけれども、そこから品川へ行くんでも新宿へ行くんでも一円出したら行けました。そういう時代に、昭和 new 纂の方は一円だったのです。但しこの方は誰がこれを国訳して誰が注をつけたということなど、そうした事が明示されていませんでした。それに対して国民文庫刊行会の方の国訳大蔵經は装丁も立派だし何よりもその責任者名がはっきり明示されていきました。これが大事ですね。国民文庫刊行会の法華經の国訳と注と解説を書き、涅槃經の注と解説を書いたのは島地大等先生。特に涅槃經の解題は科段が非常に懇切に図示されている。あんなに骨おって研究の便を図られた本は、他にはちょっとないと思います。

ところが島地先生は教室へ入って来て腰かけるとすぐ、ゴホンゴホン・ゴホンゴホンとたてつづけにせき込まれる。危なくて前列の方は誰もよりつけず、皆隔った所に坐っていました。こうして胸を悪くせられた先生はとうとう翌年、私が二年の時に亡くなってしまうわ。その二年の時には『法華玄義』の講義を聞きました。初めの所を色々詳しく講義をされました。「妙法蓮華經玄義」と題名を読んだ後その次に「天台智者大師説」と書いてあるでしょう。「こは声を出して読んではいけないよ、目読して声を出さぬのが敬意を表すること、それが昔からのしきたりだ」と、そういうことも教えて下さった。それから天台のものだったら発音に色々伝統があるでしょう。蔵通別円の中の下二字を「ベッテン」と言う人もあるし「ベチエン」と言う人もある。三井寺系統と比叡山系統とでこうも違うんですね。そういうことも詳しく教えてもらいました。だけれども途中で早く死んでしまわれ、まことに惜しいことでした。

（以下次号）